

殉空の碑に思う

大分県立竹田高等学校

菅 祐斗

私が住む大分県竹田市は、滝廉太郎の荒城の月で知られる静かな山間の町です。その山奥に『殉空の碑』と刻まれた石碑がひっそりと建っています。ところが、毎年五月五日には、百人近くもの人々がここに集まって来ます。私は、中学生の時に初めて訪れて以来この碑について深く知りたと思いました。

『殉空の碑』は日本とアメリカ両方の飛行兵の死を悼み、二度と戦争が起きないことを強く願って工藤文雄さんが、私費で造ったものです。私は工藤さんのご子息、勝昭さんにお話を伺うことができました。

太平洋戦争末期、日本の各地はアメリカの大型爆撃機B二九の無差別攻撃により、多くの人々が死傷していきました。そんな時、福岡方面を爆撃したB二九を追って日本の戦闘機一樹が体当たり攻撃をしました。それは弱冠一九歳の粕谷欣三飛行兵でした。母の手紙を胸に竹田の上空で散っていったのです。五月五日のことでした。

機体が破損し炎に包まれたB二九は、工藤文夫さんの畑に墜落しました。乗っていたアメリカの飛行兵たちは落下傘で脱出しましたが、村人らの攻撃を受けるなどして三人が死亡。生き残った九人は日本の捕虜となり、そのうち八人が悲惨にも九州大学で生きたまま生体実験にされ、無残な最期を遂げたのです。

戦後、しばらくして、東野さんというお医者さんが工藤さんのもとを訪ねてきました。東野医師は、戦争当時、九州大学の医学生でアメリカ兵の生体解剖に立ち会った人でした。敵の兵士であるとはいえ、命を助けるのが務めなのに、なぜ、あんなことをしたのかと、ずっと苦しんでいたそうです。そして、あのアメリカ兵がどこから連れてこられたのかを調べ、工藤さんにたどり着いたのです。凄惨な記憶にさいなまれながら、過ちに正面から向き合うことはどんなに悩んだことだろうと私は想像しました。

工藤さんとご子息の勝昭さんは、東野医師の話に大変なショックを受けたそうです。工藤さんは、粕谷飛行兵と、アメリカ兵たちの霊を弔うために、B二九が墜落した自分の畑に慰霊碑を立てる決意をしました。石を切り出し、磨き、一年かけて造り上げ、殉空の碑と刻みました。それから毎年、五月五日に、この碑の前で慰霊祭が行われてきたのです。

私は衝撃を受けました。時代が違えば、B二九に突撃したのは自分だったかもしれない。国が違えば、私は生きてままだま生体実験にされていたかもしれない。戦後一転、戦犯と言われたら。私たちは、戦争の犠牲者たちの命と苦しみの上に今、この瞬間の平和を受け取っているのだと理解しました。私は工藤さんや東野医師の平和への祈りをつなぐ一人でありたいと願い、今年も碑の清掃に参加しました。

B二九が墜落した時、目撃した人の話が残っています。一人のアメリカ兵が見つかり、五十人もの村人に囲まれました。両手を挙げ、命乞いをしましたが、村人は竹槍や鎌を振りかざし怒りにまかせ襲いかかろうとしました。その時、一人のお年寄りが飛び出して、兵士を背後に庇い、叫んだそうです。「皆聞いてくれ、捕虜を殺してはなりませんぞ！」村人は「何を言うか！お前は非国民じゃ！やれ！」と、激昂しました。「いいや。絶対に捕虜は殺しちゃならん。俺は日露戦争に行つとるけん良く知つとる！」と激しい気迫で立ちほだかり、身をもって捕虜を守ったそうです。

戦争は狂気です。正義の名のもとに皆が同じ方向へ走り、倫理も人間の尊厳をも失って殺し合いをします。しかし、お年寄りは何の武器も持たずに殺気立った五十人を制したのです。この勇氣ある行動に私は深く感動しました。

私は殉空の碑の前に立つ度に、かけがえのない若い命と希望のある未来を断ち切った戦争の無残さに心が痛みます。

そして、平和を願い、恩讐を超えて敵味方なく兵士たちの慰霊の為に碑を建立した工藤さんの博愛の心。

どんなに辛くても、誤りから目をそらさず、懺悔を続け、良心に生きた東野医師のこと。

村八分にされることを覚悟で人道を貫き敵の兵士を助けたお年寄りなど、人

間としての尊い生き方を学びました。

今、現在も世界中のあちこちで紛争や争いが続いています。破壊力のある兵器で互いにけん制しあう国と国のあさましい姿があります。しかし、私を含め多くの人は普段、平和のありがたさを意識することもなく日々を送っています。

私たちは「戦争は絶対にしてはならない」と声をあげ続けた戦争体験者たちの思いを、しっかりと受け継がなければなりません。

私は、殉空の碑に学んだこと、思ったこと、感じたことを今後とも、周囲の人々に機会あるごとに語り続けたいと思います。